



小学校英語指導のポイント・ヒント

小学校英語教育学会和歌山理事 東悦子（和歌山大学）

2020年度、小学校3・4年生で外国語活動が、5・6年生で外国語科が開始されました。2年間の移行期間を経ての全面実施1年目といえども、中学年で年間35時間の外国語活動、高学年で70時間の外国語科の指導を担当される先生方におかれては、予期せぬコロナ禍の状況の中、これまでとは異なるご準備や指導における配慮や工夫も必要であったことと拝察します。新学習指導要領における指導について、今一度、要点を振り返り、今年度の経験を踏まえつつ、次年度への準備を整えることにつながればと考えます。

中学年で、「聞くこと」・「話すこと」に慣れ親しみ、高学年では、「聞くこと」・「話すこと」の言語活動に加え、「読むこと」・「書くこと」に慣れ親しむ段階へと進みます。ここでは、母語修得のことばの発達に関する知見が有用です。親しい養育者などからことばのシャワーを浴びる中で、音とモノ（の概念）を結び付け、意味のない音の発生から1語文へ電報文へと段階を踏みつつ、ことばが産出されます。ことばには文法的な誤りも見られますが、養育者は子供のことばを受け取り、幼児の気持ちに寄り添いながら文法的に正確な表現で繰り返します。例えば、(幼児)「パパ、ブブー、きた」(母親)「パパが車で帰ってきたね」(幼児)「パパかえってきた」と、幼児がことばを拾って繰り返すような会話のやり取りです。英語発話の誤りについては、複数のSが抜け落ちたままでよいのかと議論のあるところですが、外国語科においても、(児童)“I like fruits. I like apple.”(教師)“You like fruits. You like apples.”や“ Oh, me, too. I like apples.”のようにやり取りを繰り返す中で、しだいに文法的な正確さも身についていくと考えられます。

読むことに関しては、アルファベットには名称と音があります。例えば“pet”は、「ピー」「イー」「ティー」の名称の文字が集まって意味を持ち、発音は「ピー・イー・ティー」ではなくて、[pet]です。その文字を見ながら発音を耳にし、発声してみる。そのような繰り返しから、児童はしだいにアルファベットとそれぞれの音を結び付け、文字を見て発音（読み方）を推測していきます。また、JingleやChants、絵本などは、音やリズムを認識するのに役立ち、絵本はストーリーの内容を推測する力を養うことにもつながるでしょう。教師の問いかけが児童の気づきや推測力を引き出すきっかけとなります。

書くことに関しては、例えばI like bananas.の文字を写すことから、英語の文の並び方や単語間にスペースを空ける書き方を意識することができます。さらには自分自身の好みに応じてI like apples.と書くことを重ねていくことで、単なる文章の筆記ではなく、自己を表現することへと展開します。自らのことを外国語で表現できることは世界のより多くの人々とのコミュニケーションを可能とするでしょう。音声言語を手段として、まずは教師やクラスの仲間とのやり取りから、文字言語によるポスターなどの方法による発信へと展開します。

5領域「聞くこと」「読むこと」「話すこと（やり取り）」「話すこと（発表）」「書くこと」におけ

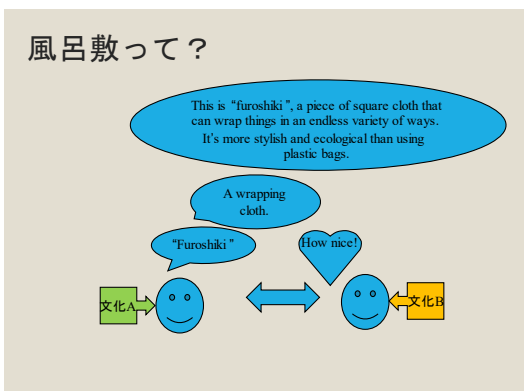
るさまざまな言語活動を通して、①知識・技能②思考・判断・表現③主体的に学習に取り組む態度を養うことに至るプロセスは、年間を通しての毎時の授業の連続性、外国語活動から外国語科へと学年進行という連続性の中で生まれてくるといえます。さらには、この3つの観点は、小学校から中学校への接続において深められていくものと考えます。

評価については、3つの観点を評価基準として、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、児童が判断、思考して表現しているか(②)を見取ることが求められますが、児童がそうしようとしている態度(③)と一体的に見取ることも可能といえます。評価は、先述の連続性の中であって、児童が粘り強く取り組み、学習を調整していく姿を捉えることであり、教師自身の指導の振り返りともなるものです。

教員養成に携わっている同僚と意見交換をしました。外国語科では教科書を使用することになり、教科書にある活動をその順番で漏れなく教えることにのみ意識が集中してしまう場合があるようです。教科書や教材の充実が切望されてきた点ではありますが、教科書を進めるうえでも、指導の知識や技術を高めることに加え、指導者は、常に目の前の児童の実態を十分に把握し、柔軟な思考・判断を持って指導(=授業における指導者の表現)をすることを心掛けられればと感じます。

参考：他者意識について

外国人の方へお土産に風呂敷を贈りました。その会話の一部ですが、“That’s *furoshiki*, a wrapping cloth.” “Oh, thank you.” その後、届いたメールで、“...Also, thank you again for a beautiful scarf. It’s gorgeous!” 風呂敷をスカーフとして巻いてくださっていたかもしれません。他者の文化背景への配慮が足りなかったと反省した経験でした。他者意識(他者への配慮)があれば、風呂敷で包む習慣がない国の方には、もっとことばを尽くして説明することが必要でした(図1)。そのためには自らの文化の知識も不可欠です。また、言語だけに頼らずに実際に包んで見せるなど、伝える工夫も必要でした。児童が英語を使ってやり取りをするときに、言語の知識・技能に加えて、実際に他者と対面したとき、どう伝えればよいかを思考し、より効果的な伝え方を判断し、例えば、繰り返して言う、あるいはジェスチャーも交える等の工夫を凝らして表現している場面に出会います。他者意識が働いていることが窺える様子です。



参考文献・URL

・文部科学省(2020)「なるほど!小学校外国語」シリーズ ①②③

- ① <https://www.youtube.com/watch?v=LtCjrVFOsmg>
- ② <https://www.youtube.com/watch?v=983p0QScfSg>
- ③ <https://www.youtube.com/watch?v=O2TrA1K8E64>

(直山木綿子視学官が詳しく説明をされています。)

・岡本夏木(1985)『ことばと発達』岩波新書

図1：東(2012)「異文化間コミュニケーションとブランディング」和歌山大学観光学部『観光概念の革新によるブランディングビジネスモデルの創造第2回中間報告書』224頁